

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	第五高等學校の人々と火のみちのくちへ行軍の道ゆき : 文苑
Author(s)	園, 哲雄
Citation	龍南會雜誌, 31: 52-57
Issue date	1894-11-28
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4473">http://hdl.handle.net/2298/4473</a>
Right	

丈夫豈傲兒女子徒爲涕泣乎聞先人幼備嘗艱難寄跡於親戚夙慨家道不振遂奮然懷  
 星金負笈於京師業已成一旦歸鄉時父母老無可養者乃決意開業遂以醫鳴矣嗚呼先人  
 以落魄之身遊于千里之遠挽回家道於既衰恢復家聲於將墜誠可謂吾家之中興矣余  
 不肖蒙先人薰陶日非一日餘音歷々猶在耳當蚤夜奮勵雪孜孜誓以必死酬鴻恩之  
 萬一耳嗟乎庸詎知無他日業成志遂錦衣歸鄉駘蕩陽春再詣此墓使先人之靈欣然瞑  
 目泉下之時耶俄而前山變容谿谷震動寒飈颯然撒霰而至乃倉皇下山咫尺矇々晨乎  
 昏乎不能辨矣

自期如此可知思先人非徒然也

甲午梅雨時節

笠間益妄批多罪

## 第五高等學校の人々と火のみちのくちへ行軍の道ゆき

助教 授 園 哲 雄

### 一段

いふも久しき弘安の、昔にありき元寇は、そのをりとのみ思ひきや、かゝる明治の文明に、日  
 本魂あることを、知らでやなめきから人は、僅に三人歸りてし、その胤をから懲りずまに、惡  
 しきたくみを拷<sup>ガク</sup>食<sup>フス</sup>、新羅<sup>シラキ</sup>の國になさんとは、

### 二段

時宗ぬしと秀吉の、うしとのみいと武き名を、もはら揚げしは口惜しや、われ今彼をことむけ

て、二人の上に由でばやと、彌猛心の一筋に、齒がををまゝうひありて、牙山の砦をうち破り、海にも敵をうち沈め、生捕る事も多かりき、

### 三段

あやにかしこき現つ神、わが大君はさゝらがた、錦の御旗秋風に、ふきまびかして大御稜威、廣嶋にさへ出て給ふ、時こそよけれ平壤の、敵はうの日にこそころし、うれしきことは尋常の、事をしいへばこれをしも、いはゞ中々をふならん、

### 四段

わが同胞はもろこしの、矢丸の雨を犯す世に、れたしき窓をおし開き、心ゆくまでこの文を、學ひ習ふはわが君の、こよなき大御恵にて、報ゆるすべもあらざれば、せめて平戸へうち出て、この世を盡ふいささしを、高麗の海原見はらさん、

### 五段

劍は腰に銃は肩、立田の山にあからひく、旭の旗をあげ初めて、光くおなさぐま本の、高橋川を下りつゝ、百貫石ゆ行く船を、送る人影はのかにて、心は海を渡れども、ふみしなければえらずやと、跡はえら波ばかりあり、

### 六段

夢かうつゝか玉鉾の、みちのくになる松嶋の、緑の松は目の前に、高く立てるも臥したるも、下にたれつゝ白ゆふの、浪をかけても見ゆめるは、九十九嶋てふ嶋原の、港なりけり戦の心、有馬の城を移しにし、跡にふく風身にぞしむ、

七 段

温泉岳を仰ぎ見て、西へ出つれば三日月の、見おくり顔の眉山も、雲間より立てり神代は、あり馬の軍ありし時、築きし城の跡ぞとて、有明洋と天艸の、洋との會津いと狭く、つゞける陸はゆく人の、過ぎがてに見るけしきあり

八 段

とく進めよと諫早に、名も高城の社には、地の祖の龍造寺、家晴ぬしを祭をりと、本明川にちぢみある、橋の眼鏡は都ある、萬世橋にさもよたり、永昌具津久山古賀、早く過ぎゆく矢上には、ゆきさふ人もにぎはし、

九 段

空澄む秋の日見畔、谷に湛ふる源は、下へ巧に遣水を、埋樋遠く長崎の、浦の戸たゞ千々の船、立つ橋は森をせり、伊木力大村鯛の浦、躍り行くへは彼岸にて、具足玉てふ勅、いつか彼岸となまりけん、

十 段

球麻の川瀬のうれあらで、逆かまく濤の早瀬戸は、げに早岐かまうの西は、闇にとびかふ蚊の鳴、細き名もてる針尾嶋、日宇村ふれば佐世保にて、雲の烟に虹の壁、つゞける艦は龍のごと、やがて躍りて支那へ入り、風の木の葉をちらしなん、

十一 段

むげなさをから心、よく見て痛く討てよとの、ためにやあらん眼鏡岩、見過ぎて越ゆる襟

峠、幣<sup>ハタ</sup>もとりあへざりしから、紅葉の錦手向けつゝ、豊<sup>トヨ</sup>の國ある耶馬の溪、こゝにもありと思ふまで、高岩水に墮ちんとし、常盤樹空をおほひたり、

## 十二段

明石あらねどほのぐと、九十九島にかくまゆく、舟をしと見る江迎は、五島まで見ゆ田平より、たひらと祈る名にしれふ、雷の瀬戸うちわたり、平戸の城は君がため、萬代祝ふ龜岡の、社たふとし玉の緒の、長き千里の濱もあり、

## 十三段

千とせを君に捧げあん、鶴が峯には御館<sup>オグサ</sup>あり、西の國ある西のはて、あはれ都は遠くとも、いとあきらけき文のわざ、鬼とりひしく武き道、かね備りて大君の、御楯<sup>ミタテ</sup>とならん御心ぞ、久方の天荒金の、地<sup>ツチ</sup>をも動し給ふべき、

## 十四段

玄海灘の口に立つ、屏風の岸にうつ浪の、花ささぬるは廣瀬にて、港の嶋は黒子にて、南龍崎は臺場跡、子持石には手を觸れそ、石にてかけし幸橋<sup>サイ</sup>の、奥には昔阿蘭陀の、船をつなぎし松もあり、築きし壁も井戸もあり、

## 十五段

ふたゝび瀬戸をたひらにぞ、渡りて北は玄海の、洋に沿ひゆく前にては、大嶋迎へ後には、安満の岳のいと高く、聳えて人を送るめり、御厨<sup>ミツリヤ</sup>村は檢校<sup>ケンギョウ</sup>の、下り給ひし名残にや、志佐今福は元寇の、烈しうりつる跡ぞとよ、

十六段

憎き寇らは有りねよ、對馬と壹岐との人々を、屠りつくしてこゝもまた、親を殺され子をうたれ、財も家もやううせぬ、さもあらばあれ外國トツクニの、耻はうけじと矢丸をば、物ともせずに進み出て、うちこむ太刀の鋒は、火花を四方にちらしけん、

十七段

今こゝろ死ぢめ海ゆかば、水漬ミヅくかばねと誓ひけん、誠は物を動して、すはや吹きまく大風に、怒れる濤の鷹嶋は、空に飛ひ立つ潮の沫、底ひに沈む敵の艦、藻屑とありしもの中よ、みたりはわざと歸らしめ、武きわが名ぞ傳へにし、

十八段

物に狂へる支那人は、はかちき軍をまた起し、今はや四たびは大敗、這々半はにげ去りぬ、突けよ進めよとが軍、蹂めフよミツ欄れよかの都、こたりはたろか一人をも、許すものかはこたびこそ、四百餘州をことぐく、貢ぎ奉らすべけれ、

十九段

伊万里イザナリに鬻く有田焼、これ福嶋の基にて、又濱焼ぞよきといふ、唐津は昔さて彦の、遠き船出のところに、領巾ヒレをふりつゝその船を、招きかへさんとせし人の、叶はで遂に加部嶋へ、飛びて石にぞ化りしかば、祭りて田嶋といふとかや、

二十段

玉嶋川は足姫タラシ、尊の新羅うたましと、うけひてつりし年魚をきて、めづしどころはの給ひし、

めをまよかへて郡をば、松浦と呼へれ文祿の、名古屋もさのみ遠からず、いつれも今の世の中に、よしある處ありければ、とふらふ袖も露繁し、

二十一 段

沖つ白浪うちよする、虹の松原れのづから、うよめく風の琴の音を、まどぬきく日はから錦、たうやく惜しきものところ、小城の櫻が岡の花、をりあらぬこそ恨まれ、ある聖をも伴ひて、見せたましうば見所の、あきものろはといひあまし、

二十二 段

天山に立つ碑は、麗せき阿蘇の大丈夫が、たうらの濱に敵をうち、來りてこゝにみよしの、とかどのみため潔さ、名をとめたる處あり、もしさかしまの世にあは、かくてぞ操立てつべき、かくてぞ國を興すべき、かくてぞみかどは護るべき、

西征雜詠（其二） 教授 笠間 梧園

宿松嶋枕上作

繞枕波濤吹晚風。喧囂恰與在船同。此身不是竄流客。一夜眠安孤嶋中。

旅寓獨酌醉中放歌

日暮海風吹髮生。豪氣勃勃欲鞭鯨。天涯官跡茫如夢。悔携筆硯入帝京。丈夫成名豈無

地。報國未必在簪纓。雪後孤竹色愈綠。雲裡

月光不傷明。却愧圭角未得磨。哦詩輒作不

平鳴。此夜肅々寒雨下。爐邊呼得酒一瓶。哀

絲豪竹彼一時。吟哦沈々獨自傾。醉裡乾坤

堪容軀。世途艱險未足驚。即今應學幽谷鳥。

深藏羽翼未放聲。自期他日遷喬處。和氣霽

然春滿城。